



TITLE:

海外日誌(十四)

AUTHOR(S):

山本, 一清

CITATION:

山本, 一清. 海外日誌(十四). 天界 1924, 4(39): 128-131

ISSUE DATE:

1924-03-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/160039>

RIGHT:

海外日記 (十四)

Mt. Wilson Observatory, Pasadena,
California, U. S. A.

山本一清

八月二十一日(火)

朝起きて見れば、台所に蟻が侵入して來てゐる。之れがカリフォルニアで有名な蟻なのだ。早速掃除して蟻除けの粉をふりまく。十時から天文臺。午後四時半、研究室へ、セントジョン氏の紹介で同氏の妹なる新聞記者來訪。いろいろ、最近の日本の國情について、新聞記事になりさうな事を話す。

夕方、さしみを作つて見る。中々上等。食後田村氏を訪問、グループ・フルツを頂いて歸る。

八月二十二日(水)

今日も火星の古い時代の觀測史を研究。

夕方、コロラド街を散歩。

八月二十三日(木)

今日から、本部の地下室で、太陽の酸素寫眞の検査を始める。自分の考へでは、カルシウム寫眞よりも、ある意味に於いて此の酸素寫眞が面白いものらしい。

夜、平松夫人來訪。

八月二十四日(金)

ハガキで、本日ヤーキースのフロスト臺長がロスアンゼルスに到着のこゝを知つた。それで午後三時過から同市へ行き、英子と共に夕食を認めた後、ホルテモア・ホテルへ行つて見ると、其のホテルの入口に近い休憩室に恰もフロスト氏が杖にもたれてゐた。早速、近づいて挨拶、それから、去る七月に別れた以來の話しなごす、フロスト氏はヤーキース日食觀測隊の模様など話さる。一時間程話した

(二六)

後、カタリナ島に於ける面會を約して別れた。

安田兄から珍らしい日本茶を贈つて下さつた。

八月二十五日(土)

夕方、田村氏宅に招かれて行き、同所で、水盛、内田兩氏の手になる純日本式の御馳走を頂く。それから暫く世間話。九時過ぎ歸宅。加藤首相逝去の新聞報を見た。

八月二十六日(日)

朝十時、高岡氏に迎へられてハリウヱドの獨立教會へ行き、禮拜に出席す。(英子は在宅)

午後、小樂竹、高岡兩氏と共に、伊藤氏のカーでロスアンゼルス博覽會公園に行き、先づ、十二萬人を收容するといふ評判の野天劇場に於いて、國際聖書研究會の大講演を見、それから美術館に入つた。

午後六時、丘井氏方で、バサテナから來着する英子を待ち合せ、夕食。それから一同打揃ふて、又、獨立教會堂に歸り、八時から、天文學の通俗講演會に、自分は日月食の話から、一般の天文談をし終りに幻燈齋を見せた。百人ほど來會者があつた。夜半十二時送られて歸宅。

八月二十七日(月)

研究室で太陽學の歴史をしらべる。

八月二十八日(火)

本部の地下室で、太陽の酸素寫眞を検査す。

英子は、今日、ロスアンゼルスからの歸りに、電車に乗り、間違へて、S.P.線の急行に乗り、エルモンテの東まで行つて、七時頃に漸く歸宅した。之れも外國での経験の一つ。

夕方、田村氏宅を訪問したら、夫人は病臥してゐられた。

山本首相新任の電報を見た。

八月二十九日(水)

今日も太陽の酸素寫眞の検査。

夕食に、英子はおすしを作つた。日本食の味は好い。

文部省より學資到着。又、和歌山の吉田氏より、珍らしや、練半羹を送つて下さつた。

八月三十日(木)

午後、アダムス臺長が室に來訪して來たので、數日來の太陽のカルシウム寫眞検査の結果を見せたら、大喜びであつた。アボト氏からの新材料を待つて、今後の研究を進めねばならない。其の後、本部の地下室へ行つたら、ダン・マーネン氏が琴座輪狀星雲の視差を測定してゐた。傍で之を視つて、渦狀星雲の内部運動の件から、星團の内部運動及び視差などの問題に關して、二三十分意見を交換した。氏は星雲の内部運動の發見に關し、世間に反對論が可なりあるのな氣にしてゐる。

先日、ミス・セント・ジョンに話した事が、今日のスター・ニュースに長い記事となつて載つてゐる。

夕食後、マレンゴ街からコロラド街を散歩。

八月三十一日(金)

朝、英子は平岩夫人に運れて貰つてメザリス店で買物。

自分は例の通り。オフイスで今日はカルシウム太陽寫眞の曲線を研究した。

夕方、田村氏を訪問、夫人は大に快方であつた。

九月一日(土)

午前中、天文臺の研究室へ行つた。行く途中、スター・ニュース新聞社前のフレンチで、昨夜横濱に大地震があり次で大火となつたことを知つた。心配々々。

正午歸宅。それから、約束により、平岩一家の案内でサンデーゴへ行くこととし、一行六人が自働車に乗る。車はサン・ガブリエルからホイテア、フラートン、アナハイム、サンタ・アナ等を経、サンノアン・カピストラノのミシヨン建築を左側に見た後、暫くして海岸に出た。海の景色は好く、砂原にテント生活をしてゐる人々の有様も面白い。カーシアン・サイドの少し手前の高原に車を止めて、おすしの持参ランチを頂く。途上は、我々と同じく、二日連續のホリデー

を費すためにロスアンゲルス方面から南下する自動車で一ぱいである。午後七時頃、デルマー、ラホヤを通過して、いよいよサンデーゴ市に入り、電飾にかざやく美しい街路を見た後、林氏の案内でサエスターン・ホテルに投宿す。

夕方、支那食の御馳走の後、田村牧師の紹介狀を携へて、當地の菊地牧師を訪れた。夫人のみ在宅。

九月二日(日)

今日は、終日、サンデーゴ市内外の見物をする。それに、林氏がガイド、平岩主人がショファアといふ格で、吾々兩人は誠に贅澤な待遇を受けた。——先づ朝食後、バルボア公園へ行き、舊博覽會跡の立派な建築とカーネギー圖書館の構へと、美しい花園を見る。日曜日なので人が多い。それから動物園に入り、蛇の驚くべき多種類を見た。十一時半頃、一寸、園外のベンチに腰かけて、携へて來たランチを食べる。

食後、暫くの間、市の山の手の住宅地の邊をドライブし、二時頃、舊いミシヨン村に着、歴史的な建築やラモナ女の遺物などを見る。それから、方向をかへ、一目散に西へ走つて、ポイント・ロマの岬の鼻まで行き、そこで、ワイルソン山天文臺から運んで來られた日食觀測設備を見る。景色は好いが、海に近く、霧が頻繁で、天氣は餘り有望でないとのこと。

ポイント・ロマからは、歸途、心靈學院を左に見て、カーシアン・ビーチの海水浴場を一巡、それから再びバルボア公園に歸り、暫く芝生の上に休憩。夕方、ハイ・スクールの運動場を見て、のち、歸宿。自分等のみは歸宿の代りに、菊地牧師を訪ひ、暫く雑談。其の後、招かれて支那料理の御馳走になり、自働車で市内の夜景を見る。九時頃、連れられて日本人の教會へ行き、突然の請求で「天文學の教訓」に關する講演をした。

九月三日(月)

朝七時、宿を出發、全く元の道を北上して歸途に就く。海岸を走るので、アメリカの普通の標準から見れば、景色の好い道路には驚

ひないのだが、二度目には飽きる。車の中で睡氣を防ぐため、菓子や果物を食べる。何の理由か、車のスピードが、一昨日よりも少し遅いらしく、バサデナの宅へ歸着した時は午後四時であつた。

夕食前、一寸、天文臺の研究室に行く。途中で新聞を買つて日本の震災報告を読み且つ驚く。天文臺ではエーリマン氏が見舞ひを述べてくれた。

夜、田村氏方を訪問。

九月四日(火)

いよくカタリナ行き、但し今日は單獨。朝八時二十分にバサデナのS.P.停車場から出る特急電車に乗る。車中、新聞で讀む東京の震災は益々甚だしい。九時半、車はウイルミントン着。直ちに「アブロン」號に乗船、十時解纜、日本からだといふうれりに揺れながら正午過ぎにカタリナ島アブロン港に着。濱でパークハースト、リー兩氏に會ひ、案内されて、アイランド・グイラ旅館第二一八番カテージに入る。

午後一時半、早速、リー氏のドライブする自動車に乗せられて、日食觀測點「リグレー・カンブ」に登る。山上は海拔一千三百呎、途中の景色は頗る好い。カンブではフロスト臺長を始め、モリアハウス、ウイルソン、フアス、ハリス諸氏に會ひ、一通り觀測器械設備を見る。

午後三時半に下山、フロスト氏と暫く海岸通りを散歩の後、名産のトウナ魚の料理を食べた。

九月五日(水)

朝八時、又、リー氏のトラックで登山、觀測準備を手傳ふ。正午キングストン、ビーフエルト兩氏と同道徒歩下山。途中、いろいろ天文教育に關する話をする。米國では大學豫備時代に通りの天文学を教へるのは頗る好いことであると思ふ。日本にも之れを實行しなければならぬ。

フロストの勧めにより、早く英子を連れて來るため、今日午後四時出帆の便船でバサデナの宅に歸る。——英子は夕食後、平岩家の

人々と自動車で市内を散歩してゐたが、八時頃歸宅。

九月六日(木)

午前中、暫く研究室に行く。

正午、兩人同道、ロスアングルス市へ行き、自分は小葉竹氏を訪問してゐる間、英子は裁縫學校の卒業式に列席し、二時過、卒業證書を手にして小葉竹氏方へやつて來た。

午後二時四十五分、兩人でP.E.停車場から電車に乗り、四時、ウイルミントン港で乗船、すぐ解纜、六時アブロン港に着。旅舎に入る。

夜七時半より、島の學校で、カンブの天文家の打ち合せ會に出席。フロスト氏發議者、ウイルソン氏座長となり、フオタス、ステビンス、ビーフエルト、クランプ諸氏の意見發表あり。十時頃終る。

九月七日(金)

午前中、海岸通りを散歩。濱風が吹いて涼しい。十一時から、辨常携帶、徒歩で兩人共々カンブへ登山。さすがに途中は暑かつた。夕方トラックで下山。

夕食後、ギリシャ劇場で音樂會をきき、九時から招かれて舞踏場に入り、リー氏よりギデンク一家の人々に紹介された。

九月八日(土)

午前中、海岸通り散歩。午後一時頃、ギデンクスの別荘を訪問、話したしたり、景色を見たり。

午後三時からトラックで登山。ブライアント氏と共にコロナ寫眞撮影の練習をやる。夕方下山。

夜、旅の隣りの活動寫眞を見る。

九月九日(日)

朝食後、十時から硝子底の船に乗り、海底の珍らしい世界を見る。潜水者の仕事も面白かつた。船は海豹岩のあたりまで行つて引き返す。

午後三時、トラックで登山。今日が最終日の練習をなす。

九月十日(月)

いよ／＼今日は日食の日である。空は曇つて、霧もあるけれど、晴れるだらうと思つて、朝早くから皆々威勢よくトラツクで登山。カンブの附近は一般觀覽者も可なり多い。

午前九時、ウイルソン天文臺からの無線電話は「有望」のことであつたけれど、十一時過ぎサンデーゴから報知によれば「曇り甚だし」である。十時半頃、一度、太陽が雲の間から見えたことがあるが、後又曇りで、遂に望みは絶えた。皆々残念がつてゐる中に、十二時五十分過ぎから暗黒となり、同五十七分に明るくなつた。日食は雲の上で確かに起つた筈だ。しかしカンブの仕事は全然駄目であつた。

午後五時に器械の荷作り、夕方下山。

夜、隣りの活動寫眞館で Variety Ban を見る。

九月十一日(火)

午前中、宿で荷を片付け、午後四時出帆の船に乗り、八時ロスアンダレス着。日本人街で夕食をたべ、十時半頃バサデナの宅に歸る。今日、船でボモナ大學のプラケット教授に會ふた。氏はカタリナ島の地峡で觀測に成功したといつてゐた。

九月十二日(水)

午前中、研究室へ行つた。ウイルソン山のアボト氏來訪。次で又新來のワンデンリンデン氏來訪。

正午歸宅。午後四時、英子と共に平岩夫人を訪問。

ミス・グレンビー及びエトケン氏より震災見舞狀來る。

九月十三日(木)

英子は疲勞で終日在室、臥床。

自分は研究室で太陽熱の曲線を書く。

パークヘーリスト、モールトン、フロスト氏等打ち揃つてカタリナより歸り、ウイルソン天文臺に來訪。

夜早く就床。

九月十四日(金)

天文臺へはカタリナ島から歸つて來た天文家連がつめかけて來て、今日も圖書室は終日賑はしかつた。リクのエトケン氏も見えてゐた。

英子は田々氏方へ裁縫に行く。自分も夕方同家へ招かれて行き、共に夕食を頂く。そこへ小山夫人も來られ、暫く話す。

九月十五日(土)

研究室で太陽の水素寫眞を調査す。圖書室は今日も客で一ぱい。フロスト氏とエトケン氏が干渉計問題について話してゐる様子が面白かつた。

午後四時から、パウエン・コートのセント・ジョン氏のテイに招かれて行く。御歴々が皆來てゐる。英子はボーランドのロリア教授につかまつて日本の事をきかれてゐた。

九月十六日(日)

朝十時からミス・ギデンクスに誘はれ、カタリナから來たり、市及びギデンクス夫人と吾々二人と、すべて五人が自動車に乗つて、市の郊外をドライブし、正午頃、サン・グアテマルのホリングウオス方に立ち寄つて、草花などを見せて貰ひ、午後一時半、宅まで送つて頂いて歸つた。

午後五時よりヒル通のアダムス臺長の宅のテイに招かれて行く。明日からの學會に出席する天文家たちが皆來てゐるので、流石の廣い邸も、今日は人で一ぱいである。ミチエル氏と暫く話した。

九月十七日(月)

今日から三日間、當地で來國科學會が開かれる。精しく言へば米國科學進歩會の太平洋岸部第七年會と同西南部第四年會、同夏期會の聯合したもので、之れに加はつて、アメリカ天文學會第三十回總會と太平洋岸天文協會との聯合會が開かれる。しかし特に此の時機を撰んだのは、言ふまでもなく、日食に因んだのであるから、會全體が著しく天文の色彩を帯びてゐるのは無理もない。自分は今朝九時、天文臺本部からエリマン氏の自動車に乗せて貰つてロスアンダレスの南加大學に行く。十時に登記、それから直ちに第二〇六番室で天文部論文會が開かれる。リクのカンペル氏が座長となり、新會員推薦の後、ロイシナー氏を先頭に、論文朗讀があつた。就中、自分には空氣の屈折問題に關するロイ、タカー兩氏の文が面白かつた。

ランチは大學のカフテリアで認め、午後二時からボザード講堂で大講演會があつた。共通題を「日食と相對論」とし、W.W.カンペル、S.A.ミチエル、C.B.セント・ジョン、D.T.トラランブラ、W.四氏の講演の後、ボモナ天文臺、スプロウエル天文臺、トウサン天文臺、メキシコ國立タクバヤ天文臺の順に日食觀測報告があり、最後に日食の活動寫眞が寫された。

夜はV.M.スライファ氏の通俗講演がある筈であつたが、自分は下町の小葉竹氏を訪ひ、英子と會ひ、共に夕食を頂いて、バサデナの宅に歸る。